



## 落

語教室に二人の塾生が入ったことはすでに何度か書いていたのだが、十一月二十五日について初めての高座に向いた。

改めて二人の名前を記しておく、九月入塾の活塾亭ふらめん子と十月入塾の活塾亭あーと、である。

七月、落語教室体験に訪れたのは二人姉妹で、短い小咄を試したら二人とも恥ずかしそうではあったが同時に楽しんでるようにも見えたので、案外一気に二人の入塾があるかもしれないと思った。お母さんがフラメンコを教えているので、ふらめん子とぼるせろ菜という高座名まで思いついてしまっていた。

その後、二月あまり経って一年生の妹の方が落語をやりたいと言って入塾してきた。好きなものを高座名にしよう、と言うと、みかん、ハート、チョコレートなどいくつも候補を挙げた。ぼくは、さりげなくフラメンコを挟み、「ふらめんこの「こ」は、子どもの「子」だ」と最初に思いついた高座名を決して押しつけにならないよう注意をして添えた。

しばらくして、名前を決めたと言うので聞いてみると、「ふらめんこ」と言う。「ふらめんこの「こ」は」と重ねて聞くと、「こどもの「子」と答えた。真つ先に浮かんだ高座名がそのまま採用されるに至って何だかいいスタートが切れた気がした。

あーとも同じように好きなものを尋ねたら、ピアノ、歌、おどり、お絵かき、読書、と多才を証明するラインナップだ。「アートだねえ」と感心して言ったのが耳に残ったか、「あーとにします」と言ってきた。「あーと」は多芸の総称ということで、あーとは「じゅげむ」をしてみらおうと思った。

高尾小学校の子どもたちとの四年間で、落語は何よりも場数、という教訓を得ているので、稽古が始まるとすぐ常時公開することにした。ご近所のお年寄りたちが意気に感じて、毎回足を運んでくださる。子どもたちにとつて(たぶん大人にも)必要なのは、自分の話に耳を傾けてくれる人の存在だ。他者に対して正直でいられる信頼感は、そういう場で育つと思うのだ。回を重ねるごとに声は強くなり、臆したような表情は消えていった。だから初高座とは言うものの、すでに稽古が高座と変わりなく、順調に場数は踏んでいたのである。

そしてデイサービスでの初高座、二人ともいつもに増しての力演で、利用者や職員の皆さんから拍手、掛け声、笑い声、賞賛をたんと浴びた。そしてうれしいことに踊りにだけ参加していた同級生の女兒が「わたしも落語やりたい」と塾生になった。「花の小トリオ」が誕生した。ご期待いただきたい。

## 空き家 5

## 木幡智恵美

## 生家の行く末③

半年くらい前のこと、夫の従弟にあたるHから電話があった。Hは高校卒業してからずっと東京に住んでいて、数年前家庭を持った。義母の妹(私や我が子たちはSのおばちゃんと言っていた)の息子で、家は歩いて二三分の近所にある。十数年前に亡くなったSのおばちゃんは、元気な頃「おばちゃん」と義母を訪ねてよく我が家へ来た。年が十近く離れているので、姉さんと呼ばず、おばちゃんと言っていたのだ。

Sのおばちゃんには娘もいるが、息子同様東京近辺で家庭を持っている。連れ合いを亡くした後、Sのおばちゃんは一人暮らしになり、我が家へ頻繁に来るようになったのはそれからだ。そのおばちゃんも亡くなり、家が空き家になってからはHが年に一度くらい家を開けに帰っていた。けれども、家庭を持つてからはとんと帰って来なくなった。

そのHが電話してきた内容を夫から聞かされた。「大分前に、近所のFさんが、家を買わしてくれて電話してきたらしいんだけど、その時は売る気がなくて断ったそうさ。だけど、もうHもこっちに帰る気はなくなつて、Fさんにまだ買う気があるかどうか聞いてみてくれた」

その後、夫がFさんの家に行つて話を聞くと、以前家を探していたのはFさんの奥さんの妹さんで、すでに他を当たつてそこに入居しているとのことだった。HもFさんから話があった頃は家を手放すつもりはなく、いずれ郷里に帰つて住むつもりだったのだろう。けれども、家庭を持ち、連れ合いとの話し合いを重ね、その思いは薄れていったようだ。

先日、Hの家の前を通ると、家はすっかり無くなり、新しい家が建とうとしている。帰つて夫に話すと、「へえ、売れたんか」との返事。それからしばらくして、娘と孫たちが来たので散歩に出て帰ると、「お前たちを探しに歩いたついでにSの家に行つてみたら、もう家が建つてゐる。建売つて書いてあったわ」と夫。うまく業者の買い手がついたのか。Hの決断、行動力、見事なものだ。

30代フリーター ジイさんがかかったアルコール依存症を専門分野のひとつとする信田さよ子というカウンセラーが朝日新聞の「語る―人生の贈りもの」というシリーズに登場していた。年金生活者 依存症の特徴のひとつに習慣性がある。毎日酒を飲む、毎日パチンコをする。

もともと習慣というのはやめるのが難しい。習慣そのものに依存性があると言える。ニーチェが「私は短期の習慣を愛する」（『喜ばしき知恵』村井則夫訳）と言ったのは、習慣の依存性を警戒していたからかもしれない。

やる気というのは、やる前には起きなくて、やり出してから起きるといって脳科学の研究結果がある。アルコール依存症になると、飲む前よりも飲み出してからのほうが飲みたい欲求が強まる。依存症のメカニズムは、やる気を引き起こす脳の仕組みに由来していることをうかがわせる。

30代 やる気はやる前に起きてほしい。年金 やり出してからやる気が起きる

るN人によって形成されている。それに対し、同時ではなく時間をかけてN人になった私が形成する共同体が習慣だ。

共同体に背こうとして怖くなった経験はだれにでもあるはずだ。習慣をやるめることは時間化された共同体に背くことだから、同様の恐れを強いられる。アルコール依存症者が酒を手離せないのは、酔っ払うのが気持ちいいからだけでなく、しらふになるのが怖いからだ。

30代 ジイさん、今は平気なのか。

年金 アルコールへの依存から解放された代わりに、ネットへの依存が進んでいるのに気づいた。パソコンやスマホを見る時間が家事や運動をする時間を侵蝕しだした。それで最近、パソコンとスマホを使う時間を制限し始めた。それまで起きていたあいだはぼろぼろと入れっぱなしだった電源を朝夕方と寝る前だけ入れるようにした。OFFにしているあいだ落ち着かないのではないかと思ったが、意外なこと

のは、やり出すと必ずやり足らなさを感ずるからだろう。やること、行動することは、必然的に環境の制約を受ける。100%思い描いた通りになることはない。当人は自分がやり足らないからだと感じる。その不全感を埋めようとして、もつとやろうとする。

アルコール依存症者が酒を飲み出すと、ますます飲む気を募らせてしまうのも、酔い足りない不全感を埋めようとするからだ。非アルコール依存症者は飲めば飲むほど飲みたいなくなるのに、アルコール依存症者は逆になる。

30代 それかわからない。どんなにうまくいっても腹いっぱいになったら、食べたくなくなるだろう。

年金 飲めば飲むほど飲みたいなるアルコール依存症の特性は治療に利用されている。とにかく1日だけでも酒をやめてみる。すると「やめる気」が起きる。なぜなら、飲みたい気持ちは残っていて、やめる気は十分とは言えないから、その不全感を埋めようとして、翌日もう1日やめようという気に

に逆に解放感を覚えた。

それは酒を飲むのをやめたときの解放感に似ている。それまで飲むこと以外のあらゆる行動がつまらなく見え、何をするのも苦しく感じられたのに、飲むのをやめてみると、その苦しさが消え、することなすことが新鮮に感じられるようになった。いま振り返る

なり、その翌日もまた、となる可能性がある。実際には飲みたい欲求が上回ることも多いが、酒を断つ有効な方法のひとつとされている。

30代 習慣をなかなかやめられないのは俺にもわかる。

年金 やめるのが怖いからだ。それは自らの所属する共同体に背くときの恐れに似ている。つまり習慣は時間化された共同体と考えることができる。

たとえば私が朝の散歩を日課にしたとする。散歩する私はいつも同じ私には違いないが、日によって体調も気分も性格のあらわれ方も異なり、その意味ではいつも違う私がいる。そこで、1日目に歩いた私を私1と名づけると、2日目は私2が、3日目は私3が歩き、そのまま続いていくと、N日目には私Nが歩くことになる。

それらの私を足し合わせると、私1＋私2＋私3＋…：私Nとなり、N人の私による共同体が形成されたときみなすことができる。私たちがふだん共同体と呼んでいるものは、同時に存在す

と、鉄鎖から解き放たれ、体が軽くなったような感じだった。

この解放感がネット依存の場合と同種のものだとすれば、それはアルコールに蝕まれた身体の不調からの回復だけによるのではなく、依存というメンタルな不調からの回復によるものと考えなければならぬ。

習慣が症状にエスカレートしたのが依存症と考えるなら、そこからの回復は習慣からの解放でもあるはずだ。その習慣が飲むこと以外の行動をつまらなくし、苦しいものにしてきた。鉄鎖につながれた身体にとつて、食べることと排泄すること以外のほとんどの行動がつまらなく、苦しいものであるように。

習慣のこの鉄鎖としての機能は共同体の掟と同種のものと言っている。共同体に背くのは怖い、背いてみると、解放感を覚える。ニーチェはこうも言っている。「持続する習慣を私は憎む。暴君が近くにやってきたような気がするのだ」（『喜ばしき知恵』）

ニュース日記 901  
中村 礼治

## 依存症からの解放